

(続紙 1)

京都大学	博士 (人間・環境学)	氏名	伊藤 薫
論文題目	修辞表現と言語理解の重層性—認知言語学からのアプローチ—		
(論文内容の要旨)			
<p>本論文は、認知言語学の理論的枠組みに加え、談話・テキストの観点から修辞表現を検討し、テキストに含まれる諸要因が修辞表現の理解に与える影響を考察することにより、人間の言語理解の一側面を探究することを目的としている。全体は7章から構成される。</p> <p>序章に続く第2章では、主に認知言語学、談話・テキスト研究、修辞学の各分野での修辞表現の記述を整理し、修辞表現の理解に関わる言語理論を概観する。特に、認知意味論における概念メタファー理論や認知文法における記号合成、談話・テキスト研究での結束性や一貫性、談話トピックを取り上げ、続く議論の基盤とする。</p> <p>第3章では、第2章で導入した理論をもとに、修辞表現の理解に関わる要因を述べ、どのような要因が修辞表現の理解に影響するかを提示する。3.1節では、テキストに出現する語彙項目を読み手が理解する際、その意味を喚起する言語的要因が複数の次元に渡ることを指摘する。3.2節では、文内のレベルに関わる「ボトムアップ的要因」として選択制限の違反による意味の衝突を中心に取り上げ、3.3節では、談話・テキストレベルの「トップダウン的要因」として結束性、一貫性、談話トピックについて詳述する。これらの要因を足がかりとし、実例を以下の章で考察する。</p> <p>第4章は修辞表現の中心的事例であるメタファーを取り上げ、メタファーと深く関わる隠喩クラスター、異義兼用、異義反復を射程に含めた事例研究を提示し、これらの修辞表現が表す複雑な意味の理解のメカニズムを検討する。メタファー解釈のボトムアップ的要因は、認知文法における記号合成モデルの「精緻化」と関連しており、意味の衝突を回避する手段の一つとしてメタファーを位置づけることができる。トップダウン的要因については、意味の衝突を含まないメタファーを中心に考察し、様々な文脈から喚起された意味が修辞表現の理解に影響を与えていることを示す。また、トップダウン的要因とボトムアップ的要因によって異なる意味が喚起された場合、異義兼用のような修辞的效果がもたらされることを主張する。以上の理論的考察の実証として、メタファー</p>			

コーパスを用いた量的研究を提示し、テキストで使用される語義はメタファー的であるか非メタファー的であるかに関し一貫性をもつと期待されることを示唆する。

第5章では、メトニミーを中心に転喩や異義兼用について取り扱う。それらの修辭的表現を理解する際に、第3章で提示した要因がどのような影響を与えているかを考察し、メトニミーの解釈基盤となる隣接性の構築過程、メトニミーの意味の語用論的な定着について説明を行う。ボトムアップ的要因については、表現の統語レベルと修辭表現の種類が密接に関わっていることを述べ、狭義のメトニミーが名詞を中心とした「モノ」に関わる修辭である一方、転喩は動詞句以上のレベルで表される「イベント」に関わる修辭であることを主張する。また、トップダウン的要因については、テキストで構築された隣接性が個々の文の解釈にどのように影響するか、結束性によってそのメカニズムを説明する。一般的に、特定の個体のみが持つ属性をメトニミーとして利用するには、その個体に関する知識が共有される必要があるが、小説のように事前の知識共有が困難なテキストにおいては、個体に関する隣接性がテキストで構築された上で、テキストの結束性によりメトニミー的解釈が可能になることを示す。

第6章では、第4章および第5章で行った具体例の考察から得られた知見を総括し、トップダウン的要因とボトムアップ的要因の機能について議論する。文に整合的解釈を与えるボトムアップ的要因と、結束性や談話トピックなどのトップダウン的要因は相互作用を行うが、強い要因としてはたらく前者に弱い要因である後者が介入するとき、洒落のような修辭的效果を生み出す。このことは、トップダウン的要因とボトムアップ的要因から喚起される意味が重層的に理解されていることを示唆するものである。加えて、概念メタファーによって提示された枠組みからメトニミーの理解が可能になるというメタファーとメトニミーの相互作用の実例を挙げ、テキストにおける修辭表現の意味の多重性を指摘する。

第7章は論文全体の総括と展望である。修辭表現の理解に影響を与える要因は複次元に存在し機能しており、それは自然言語のもつ冗長性や堅牢性とも関連していると解釈する。それらの性質を利用しながら、規範的な言語から敢えて逸脱することで、人間は創造的な言語使用ができることを示唆し、本論文の結論としている。

(論文審査の結果の要旨)

本論文は、種々の修辞表現を分析し、文内のレベルにおける言語的特徴とテキストのレベルにおける言語的特徴が修辞表現の理解にどのように関わるかを探求した研究である。その根底には大きく2つの目的がある。第一に、修辞表現の理解に関与することは認められるものの、その実態について踏み込んだ説明がなされてこなかった「文脈」の内実を明らかにすること、第二に、修辞表現の事例分析を通じ、従来認知言語学で培われてきた知見と談話・テキスト言語学の知見を統合し、新たな分析の視座を与えることである。以下で、本論文が認知言語学および機能主義言語学の研究としてどのような新規性を持ち、どのような貢献をなし得るか、各々の目的に即して述べる。

第一の目的について特筆すべき点は、談話・テキスト言語学の理論を援用して修辞表現の実例を分析し、理解に関わる文脈に対し新たなモデルを提示していることである。先行研究で主に用いられてきた語用論的前提や状況だけではなく、結束性、一貫性、談話トピックといった要因を明確に設定し、客観的に観察可能な対象によって文脈を説明しようとする試みは、修辞研究の方法論に対し大きく寄与するものである。特に、結束性はメタファーとメトニミー双方の理解に大きく影響していることが明らかにされており、既存の「選択制限の違反」による説明の不足を補うことに貢献している。

文脈的要因のうち、本論文で特に重要視されている結束性の機能は、小説やニュース記事など実社会で使用されているテキストの分析、コーパスを使用した量的研究によって実証されている。第4章では、メタファー表現の周辺で使用される語彙項目との結束性から分析を行い、字義的解釈とメタファー的解釈、さらに異義兼用的な解釈がなされる条件を明らかにしている。小説において登場人物を指すメトニミーについても、その名付けの導入からメトニミー的意味の定着過程を丹念に記述し、説明の妥当性が裏づけられていると言える。

次に、本論文の第二の目的については、認知言語学と談話・テキストレベルの理論によって予測される言語の意味が、修辞表現の理解に対して時には相補的に、時には相克的に働くというモデルを立てた点において独創性が見出だされる。これは、言語現象を要素還元的にではなく総体的に捉

え、トップダウン・ボトムアップの双方向の作用を柔軟に取り入れる、申請者の姿勢によりもたらされた成果である。

また、理論的な考察だけではなく、個々の事例研究も高い水準にある。例えばメタファー、メトニミーといった代表的な比喻と、異義兼用や異義反復のような周辺の修辞技法との関連性の指摘は、申請者の緻密な観察力と洞察がなければ不可能である。さらに、第5章のメタファーとメトニミーの相互作用に関する研究では、第4章で示した認知言語学的観点からのメトニミーの分析に続き、メタファー写像によってもたらされる文脈が個々のメトニミーの理解を可能にするメカニズムを詳細に述べている。このように、本論文の主題である言語の意味の重層性について、事例と理論の双方から有効な説明がなされている。

以上、本論文は、修辞表現の追究を通して言語理解の本質に果敢に取り組んだ意欲的な基礎研究として高く評価することができる。事実の観察と理論的考察、質的分析と量的分析の均衡がとれており、修辞表現の理解について多角的に議論した優れた論稿である。第4章の量的研究から伺えるように、本論文は自然言語処理をはじめとする様々な応用を見据えたものであり、その学際性も評価することができ、今後の言語学及び関連諸領域への貢献が期待される。

よって、本論文は博士（人間・環境学）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成30年1月25日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。

要旨公表可能日： 年 月 日以降